コロナ禍下における堂本光一と『Endless SHOCK』の軌跡

後藤隆基

一　コロナ禍の舞台芸術への影響

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染が拡大しはじめた二〇二〇年二月二十六日、当時の安倍晋三首相が、以後二週間にわたる全国的な大規模イベントの開催自粛要請の方針を発表した[1]。俗に〝令和の二・二六事件〟ともいわれるあの日を境に、種々の業種や分野が甚大な被害を蒙ったが、舞台芸術における顕著な影響として第一に指を屈すべきは、数多の公演が失われたことである。

二月二十六日当日には、国立劇場が三月十五日まで主催公演の中止を発表し、劇団☆新感線が『偽義経冥界歌』東京公演を一部休演。翌日以降、数多くの劇場・劇団が予定していた公演の中止あるいは延期を発表した。ことに日本演劇興行協会加盟の大手興行会社や大劇場は当初、三月上旬までの中止と足並みを揃える方向で調整していた[2]。先行きのみえない状況に直面しながら、しかしそれが長期化するとは誰も想定していなかった[3]。

政府の「要請」に法的拘束力はないが、イベント開催や中止にかんする基準等が明確ではなく、結局個々の判断にゆだねられた。したがって三月には、当時考えうる最善の感染対策のもとに再開したり、初日を開けたりする公演も少なくなかった。が、感染が拡大するなかで、政府が中長期的な指針をしめすことはなく、多くの現場は慎重かつ断続的に中止期間の延長や新たな中止を発表せざるをえなかったのである。

四月七日に最初の緊急事態宣言が発出されると、劇場の

扉が一斉に閉ざされた。五月二十五日に首都圏を含む全国で緊急事態宣言が解除されたが、ただちに再開できる劇場は皆無に等しく、数か月間にわたって舞台芸術の時間は凍結した。いわゆる「三密」が前提条件であり、接触や交流、越境を特性とする劇場文化は、その存在じたいを封じられたといってよい。

ぴあ総研の調査によれば、二〇二〇年のライブ・エンタテインメント（音楽・ステージ）の市場規模は、前年比八十二・四％減の千百六億円（音楽は前年比八十六・一％減の五百八十九億円、ステージは前年比七十四・八％減の五百十八億円）[4]に落ちこんだ。二〇二一年には、前々年比五十一・二％減の三千七十二億円（音楽は前々年比六十三・五％減の千五百四十七億円、ステージは前々年比二十五・九％減の千五百二十五億円）[5]とやや上向くものの、その損失は数字が明瞭にしめすとおりである。くわえて、当然ながら数字だけでは測れない影響があった。

当時、早稲田大学演劇博物館に勤務していた稿者は、二〇二〇年三月以降、コロナ禍による舞台芸術の中止・延期公演等の調査をおこない、その記憶／記録を後世に伝えるべく、展示や図録（書籍）等のかたちで成果を公開してきた[6]。一口に舞台芸術といって、さまざまなジャンル、劇場や劇団、興行の規模の大小があり、被害や損失の濃淡があることはいうまでもない。とくに大劇場での商業演劇が置かれた状況の一側面を象徴していたとおもわれるのが、堂本光一主演のミュージカル『Endless SHOCK』（帝国劇場、二月四日〜三月三十一日。日程は当初予定）である。初演から二十年の節目として「20th Anniversary」と副題を添えられた記念公演だったが、二月二十八日から（結果的には）千穐楽まで中止を余儀なくされた。主催者が同じ東宝の各公演だけをみても軒並み中止になっているが、そのなかで『Endless SHOCK』をとりあげるのは、いくつかの理由がある。

公演中止や対応等をめぐる判断に堂本光一自身の意思が深くかかわっていたこと。早い段階で Instagram による無観客ライブ配信をおこなった先駆性。無観客収録による公演映像の映画化。舞台上の感染対策を考慮したスピンオフ版の制作・上演など――。コロナ禍が舞台芸術にもたらした諸問題が『Endless SHOCK』に凝縮されていると考えるためである。それは『Endless SHOCK』が毎年百回近くロングラン公演をつづけるレパートリーシステムを持続している特異性によるところが大きく、事態の初期段階から現在までの約二年半という時間を定点観測的に検証可能なも

のにしている。

一方で、いわゆる商業演劇はメディアの注目度や話題性の高さに比して、研究や批評の俎上に載せられることが多くはない。しかし、多数の観客を動員し、長期にわたって上演がつづけられている舞台を看過しては、同時代演劇の動向を正しく捕捉することにはならないのではないか。

演劇博物館の取り組みでは能うかぎり広汎なジャンルの実態調査を企図したが、それらは約一年半の初期段階が対象であり、以降の時間もふまえた個別具体的な事例検討が今後必要となる。本稿は、二〇二〇年二月以降、今日にいたるコロナ禍下における舞台芸術の動態を、大劇場での商業演劇を対象として――とくに堂本光一と『Endless SHOCK』を一事例に概観し、その軌跡を記録するものである。

二　『Endless SHOCK』の二十年

堂本光一主演の『Endless SHOCK』――「SHOCK」シリーズは、二〇〇〇年十一月に『MILLENIUM SHOCK』（ジャニー喜多川作・構成・演出、帝国劇場）のタイトルで幕を開けた。二十一歳だった堂本は当時、帝国劇場史上最年少の座長として話題を呼んだ。同作は『SHOW 劇・SHOCK』（帝国劇場／以下同、二〇〇一年十二月～二〇〇二年一月）、『SHOCK is Real Shock』（二〇〇三年一～二月）、『Shocking SHOCK』（二〇〇四年二月）を経て、二〇〇五年に現行の『Endless SHOCK』（一～二月）に改題され、堂本が脚本・音楽・演出など制作面に携わるようになる。高橋豊は「帝劇の演目が、大女優による「座長芝居」からミュージカル中心へ移行していく象徴的な「事件」でもあった」（「Endless SHOCK　堂本光一の単独主演で１６００回　フライングに殺陣など全力投入」『エコノミスト』二〇一八年二月二十七日）と指摘している。

シリーズ初期段階の特徴について、高橋豊は右の記事でこう整理する。

「SHOCK」は、歌って、踊って、演技しての従来のミュージカルの要素に、体を張ったスタント（離れ業）を加えたエンターテインメントショーである。堂本は命綱なしで紅い布をつかみ客席上空を飛ぶなど「フライング」をこなし、激しい殺陣の後に、22段の大階段を「階段落ち」する。これまで一度も代役を立てず、単独主演を貫いてきた。／第1回から私は観劇しているが、初めはシルク・ドゥ・ソレイユに通じる大仕掛

けやサーカス芸の方に目が行った。

二〇〇五年以降の『Endless SHOCK』は、ミュージカルナンバーをはじめ、スタントやフライング、和太鼓、殺陣、ダンス、階段落ちなど、堂本光一の身体性が発揮されるシーンをいかしつつ、劇の主人公であるコウイチ（堂本）と彼をめぐる人びとのドラマが前景化されていく。

ニューヨークのブロードウェイを舞台に、日々パフォーマンスを磨きつづけるコウイチとそのカンパニーが、エンターテインメントの世界で頂点をめざす、バックステージものである。コウイチと彼をライバル視するメンバーの関係性をひとつの軸に描かれる。オフ・ブロードウェイの劇場で着実に歩みを進めていたある日、オン・ブロードウェイの大劇場からのオファーが来る。喜びに沸くメンバーと、冷静に自分たちの力量を見定めるコウイチのあいだに少しずつ軋轢が生じる。それが遠因となり、あるときショウの一場面で事故が発生。コウイチは死線をさまよい、命を落とす。ショウビジネスの世界を生きる若者たちの葛藤とショウに懸ける思いを表現した物語である。

『Endless SHOCK』は、堂本光一のライフワークとして定着する。年ごとに代わるライバル役の配役や演出・楽曲等の変化とともに作品は刷新され、歴史を刻んできた[7]。二〇〇九年には、森繁久彌（『屋根の上のヴァイオリン弾き』）の帝国劇場単独主演記録六百二十五回を更新。二〇一一年の帝国劇場百周年記念公演（二～三月）では、三月十一日昼の部の幕間に東日本大震災が発生し、以降年内の公演を中止するという出来事もあった。二〇一四年には千二百八回を達成し、九代目松本幸四郎（現・二代目白鸚）による『ラ・マンチャの男』がもっていた国内ミュージカルの同一作品での単独主演記録を塗り替え、今日にいたるまで首位を更新しつづけている。

『Endless SHOCK』の生みの親であり、その世界の基盤であったジャニー喜多川が二〇一九年七月九日に鬼籍に入ると、二〇二〇年からは堂本光一が「作・構成・演出・主演」にクレジットされ、ジャニー喜多川は「エターナルプロデューサー」となる。つねに進化しつづけてきた『Endless SHOCK』は二十年間、全チケット即日完売という興行的成功を収めてきた（二〇二一年以降も同様）。

しかし、ジャニー喜多川不在で初めて迎えた『Endless SHOCK』は、コロナ禍という未曾有の災厄に直面することとなったのである。

三　二〇二〇年の公演中止とその対応

二〇二〇年の『Endless SHOCK 20th Anniversary』は初演から二十年の記念公演であり、前年十一月二十日の製作発表日にInstagramの公式アカウント（@endlessshock_official）が開設されている。これは堂本光一自身の発案によるという。ライバル役は上田竜也。十二月には稽古がはじまり、新作同然に各景を細部まで再検討し、クオリティを高めていた。この公演の三月三十日夜の部が通算千八百回となるはずであり、メディアも早くからそれが疑う余地のない確定的な未来としてアピールした[8]。盤石の態勢で単独主演一位の記録を塗り替えていく舞台の節目を迎えようとしていたのである。

公演を前に、堂本光一は、舞台にかける思いをこう語っている。アイドルとしての立場や需要／受容を十二分に意識したうえで、堂本は舞台人として在ろうとする。

> 帝国劇場なら2千人足らず、東京ドームなら一度のライブで5万5千人。若い世代には、『ドームのほうがいい』と思っている子もいるかもしれない。舞台には、ワーとかキャーとかいう歓声もありませんからね。でも、その限られた空間こそ、非常に贅沢だと思いますし、望めば立てるような場所ではないことを忘れてはいけません（「表紙の人」『AERA』二〇二〇年二月十日号）

ところが、前述のごとく、新型コロナウイルス感染症の感染拡大と政府の感染症対策専門家会議の方針に鑑み、二月二十六日以降、断続的に公演中止の判断が下されることとなる。東宝のオフィシャルサイトとともにInstagramでも公演中止と払い戻し対応にかんする案内（東宝演劇部の署名）が掲載されていく。

以下、Instagramの公式アカウントへの投稿を追い、事態の経過を能うかぎり詳細にたどってみたい[9]。

公演にかんする種々の情報はインターネット上に掲載されることが基本であり、それらは多くの場合、日に日に更新されていく。ことにコロナ禍による公演の中止や延期にかかわる情報は、中止であれば内容が残ることもあるが、延期の場合は公演日程が上書きされたり、中止になった期間が削除されたりする例もあり、後から事態を遡及することが難しい。その点で『Endless SHOCK』はInstagramに折々の記録や関係者のコメント等が蓄積されており、現在

でも開設時からの投稿を――つまり、コロナ禍下の〈いま・ここ〉を目の当たりにできる。今日において、ＳＮＳというメディアが一次資料としてアーカイブの機能を果たすことにも改めて気づかされる。

さて、Instagramにおけるコロナ関連の第一報は、政府発表の翌日。もともと休演日だった二月二十七日付の投稿で、二十八日から三月十日までの中止と払い戻し対応の案内が発表された。以降、演者やスタッフからのコメントなどとともに、公演中止の報告がアカウントを埋めていく。

三月三日には、前夜に堂本光一の呼びかけで急遽演者が帝国劇場の舞台上で収録したメッセージ動画が投稿される。公演中止後、初めての外出という堂本は「外に行ったらリスクがある」ことへの危機感と、観客のいない客席を眼前にした寂寥感を口にしている。公演を中断するうえで何かできないか検討したが、観客の立場からも参加は難しい。「正直、八方ふさがりなんですよ、今」と心情を吐露。観客に「何かお返しができないかということで数日間を過ごしていた」とも述べる。こうした当事者の声が発信されることは、劇場に足を運ぶことが叶わなかった観客と創作現場のコミュニケーションの場としてInstagramが有効に機能することをしめしていた。

三月八日には、三月十五日までの公演中止期間の延長と、十六日以降、千穐楽までの公演についても払い戻しを希望の観客には対応する旨が伝えられた。

さらに三月十二日付の投稿では十六日から十九日までの中止延長が発表されるが、東宝演劇部から「帝国劇場におきましては、この休館中に消毒作業を集中して行うほか、サーモグラフィーの設置、劇場内の換気の強化等の準備を整え、いずれの公演につきましても3月20日（金・祝）より公演を再開する予定です」との案内が出た。じっさい十八日には、二十日以降の公演再開を正式に発表。演者とスタッフが通し稽古をおこなった様子が伝えられている。

しかし一転、十九日深夜に開かれた専門家会議の感染急拡大の可能性を示唆する発表を受けて、二十日十八時の公演を急遽中止との決定が当日に投稿される（この時点では二十一日以降の実施可否は改めて案内とある）。

この日――二十日の投稿には、堂本光一自身の署名でコメントが寄せられた。長くなるが、公演中止の決断にいたる堂本の意思が率直に綴られているため、全文を引用しておきたい。

急遽本日の公演中止が発表されました／正直に話しま

すね／今回の中止は自分の意向が強いです／主催側もなんとか再開を目指そうと安全策を考えて下さっておりました／カンパニーも全員で各シーンをリハーサルして備えてきました／そして昨日の専門家会議の発表を受け／すぐに主催側と自分も含めあらためて話し合いました／再開にあたり他の劇場とある程度の歩調を合わせて再開していく事は、もちろんエンタテインメント[ママ]を盛り上げていくためにも必要で大事な事と思います／しかし／自分の意見としては／SHOCKは全国から多くのお客様が集まります（専門家会議でも引き続き避けるよう発表）／そしてキャストだけでも50人／作品の特性として終始息を切らしながら地面も這いつくばり／演者同士近距離で発声し続けます／フライングもお客様の近くに行く事になります／あまり世の中の状況が改善されたと言えない中で毎日やり続けるのはあまりにもリスクが大きいと感じました／自分はコロナウィルス[ママ]を決して甘く見ている意味でもなく誤解のないよう読んで欲しいですが／例え舞台で自分が感染したとしてもそれは仕方のない事／メンバー誰かが感染して自分がもらってしまったとしてもお前だけじゃなくてよかった！／って思えるほど／舞台を愛し、カンパニーを愛しています／しかし今はまず何よりも第一に考えなくてはならないのは／こんな戯言ではなく／感染を広げてはならないという事です／そして愛するファンの方や／愛する共演者にリスクを負わせて舞台に立たせる事は今の状況で自分にはできません／他の作品が再開の判断をされるのは／今のエンタテイメント業界には必要な事だと思います／ただSHOCKに関してはやはり他作品よりもお客様にも演者にもリスクが高い作品だと自分は思っております／主催側も再開に向けギリギリまで準備をして下さった事／そして自分の意見を汲んで下さった事に感謝しております／再開発表からの再び突然の中止／皆様には一人一人の大事な時間や予定、そして感情をぶち壊しにしてしまっている事／本当にごめんなさい／何ができるか、どうするべきか今もなお協議は続いておりますが／どうか皆様にもご理解をお願いいたします／一人一人が身を守る意識を高め／1日も早く心からエンタテイメントを楽しめる日が来る事を願っています〔一行アキ〕SHOCKの持つテーマ／Show must go onの真髄は／一度立ち止まってしまったとしても／しっかり足元を見つめ／また走り出すために今なにをやるべきか、、

／まさに今こそ／その時だと自分は思っています

東宝は、シアタークリエと日生劇場を予定どおり二十日に再開しており、帝国劇場の中止は『Endless SHOCK』独自の対応であった[10]。堂本は急遽決まった中止の判断に自らの意思が強く働いていたことを明言し、新型コロナウイルス感染症対策専門家会議の提言をひとつの拠所としながら、観客はもちろん、舞台上の演者やスタッフの感染リスク回避を最優先に考えていた。再開のために協議を重ねるなかで、作品のクオリティを担保できない点も含め、主催者側も堂本の意見に賛同した結果であることがわかる。

そして同日のうちに「本作の演出上の特性や海外招聘キャストの本国帰還要請、また、新型コロナウイルス感染症の現状も鑑みて、今般の状況下では、「Endless SHOCK」の目指す本来の表現が出来ないことから、3月21日（土）～3月31日（火）の全公演について、中止とさせていただきます」と投稿される。幾度も幾度も小刻みに中止の判断を迫られる懊悩は計り知れない。その背景には日本国内の事情にとどまらない世界的な感染拡大の影響もあった。この日、堂本はふたたびコメントを寄せた。

あらためて公演を楽しみにしていた皆様／そしてギリギリの発表で混乱させてしまった皆様／申し訳ございません／その後の話し合いで、更なる安全対策演出の変更等考慮いたしましたが／USAのメンバーもアメリカから帰国勧告が出た事もあり／SHOCKの持つ本来の演出、作品の良さをお届けする事が出来ないと判断いたしました

二十二日には、全公演中止の決定を、堂本光一から演者とスタッフに報告する様子の映像もInstagramに投稿されている。東宝の常務執行役員演劇担当の池田篤郎は、のちにこうふり返っている。

演出も担当される堂本光一さんとお話しして、俳優同士が近い距離で殺陣が続く場面もあるので、この演出のままの上演は難しいのではないかと考えたわけです。光一さんは、ジャニーさんが遺された作品に決して傷はつけられない、と。もちろんそのとおりですから、残念ですが、中止を決めました。（「奇跡の一か月を創る」、拙編『ロスト・イン・パンデミック――失われた演劇と新たな表現の地平』春陽堂書店、二〇二一

年、五七頁）

また、堂本の盟友である井上芳雄が『Endless SHOCK』の中止について、堂本とのやりとりをふまえながら語った言葉が印象深い。

帝劇の「SHOCK」が早めに中止をしたんですよね。〔略〕で、光一くん、止めるという決断をして。けっこうそれは衝撃を以てみんなに迎えられてたと思うんですよね。でもそのときは、まだごはんとか普通に食べられてたから、有楽町の焼き肉屋さんかなんかで、光一くんと「どういう感じだったの？　大変だったね」という話をして。そのときに彼が言って、印象的だったのが「いろんな意見があったけど、とにかくまず安全や健康を守るということだし、『あそこのカンパニーは早くに止めちゃって、あいつら馬鹿を見たな』と言われるような結果になればいいと自分は思う」と。もしかしたら、早まったのかもしれない――その時点では、ですよ。けれども、「『あいつらちょっと早すぎたね』って言われる結果でいいと思う」と言って。「そうなればいいよね」みたいに言ってたら、残念ながら、やっぱり光一くんの判断が正しかったというか。そういうことにはなってしまったので。当時はそれくらいバラバラというか、みんなの判断も。一斉に止めてくれというようなお願いが出るとは想像もできなかったですからね。[11]

舞台に立つ俳優の率直な声であり、上演可否の判断基準が明確にしめされず、各主体に委ねられていた時期の現場の混乱を伝える貴重な証言でもある。二〇二〇年春に受けた別のインタビューで、井上芳雄は『Endless SHOCK』のテーマである「Show must go on」がエンターテインメントの世界の基盤ではあるものの、「それをやったらほかに迷惑がかかる」とし、その定義を変える意識を持たなければいけない可能性を指摘している[12]。舞台に立つこと、公演をおこなうこと、それじたいの意味が問われていた。

三　Instagramでの生配信という試み

堂本光一は、観客への濃やかな配慮だけでなく、折にふれて制作現場の実情――わけても舞台上の人たちが直面せざるをえない現実にも言及しつづけた。二〇二〇年三月初

旬のインタビューでは、こんな発言をしている。

僕より大変なのはアンサンブルのみんなですよ。ショービジネスにいる人間は完全に何もできなくなっているんです。幕は開かない、いつ公演が再開するか分からないからほかの仕事もできない。正直死活問題です。この実情はニュースなどではなかなか報じてもらえず、我々も前向きなことしか言ってはいけないというような風潮がある。僕は、それはどうかと思うんですよ。（堂本光一「20年間、みんなと全てを共有してきたことが心の支え　厳しい状況も次のステップに」『act guide』二〇二〇年三月）

さらに「ギャランティーが発生するのは幕が開けてから、本番1公演1公演。そういう現実があるんだということは言ってもいいと思うんです。〔略〕エンターテインメントの世界の脆さが今回のことで露呈した気がしますね」（同前）とつづけ、自身が「アイドル」という特殊な立場にあることを自覚したうえで、日本の舞台芸術における経済的な問題や有事の補償措置が不十分であることにもふれる。公演中止の判断を堂本が下してきたのは、そうした現実を認識してなお、つねに舞台の上に立つ共演者の安全確保のためでもあった。そのことは、これまでに紹介してきた言葉の端々からもうかがうことができる。

『Endless SHOCK』の全公演中止が決まったあと、三月二十一日にはフジテレビ系の「FNS歌謡祭」に『Endless SHOCK』のカンパニーが予定どおり出演。そして、すでに次を見据えていた堂本光一は、二十日付のInstagramへの投稿で「悲しい報告ばかりですが／22日18時より／インスタライブをやらせて頂きます／全てのスタッフキャストでお送りします（USAは来れません;;）／おそらくインスタでこんな事やった人いないだろうなというような事／やっちまいます」と、新たな試みを予告している。災厄の渦中において、ショウをいかにつづけうるか。そのひとつの手段として、堂本はInstagramを積極的に活用した発信と観客と演者のコミュニケーションの場をひらいていく。

舞台を開けること、劇場に観客を集めることが禁じられた舞台芸術界では、コロナ禍下における新手として、オンライン上での動画配信が一気に加速した。コロナ禍以前にも、たとえば、中村獅童と初音ミクが共演する超歌舞伎や2・5次元ミュージカルなど、配信を活用した公演はおこなわれていたが、十代目松本幸四郎がオンライン会議用ツー

ルのZoomを用いた「図夢歌舞伎」を実験的に制作するなど[13]、業界全体でそれが常態化していく。

「配信元年」と呼ばれた二〇二〇年。そうした動きを先取りするように、堂本光一は三月二十二日というきわめて早い段階で『Endless SHOCK』のInstagramによるライブ配信を発案し、実行に移した。無観客の帝国劇場から二時間以上、スマートフォン一台のライブ中継で、劇世界を可能なかぎり再現するという試みである。時に堂本が自らスマートフォンを手に撮影した映像――フライングもスマートフォンを片手に披露している――は、緊急避難的な試みではあったが、画質の粗さがライブ感覚と事態の切迫感を強調し、何よりも、堂本自身のほかは見ることのできない世界――堂本の視界を観客（視聴者）が共有する体験だった。稽古風景や出演者同士の何げないやりとりなども挿入し、通常の観劇体験と異なるかたちでパフォーマンスを提供。後述するように、二〇二一年と翌年にジャニーズオンラインでの生配信（見逃し配信あり）をおこなうことに鑑みれば、六万人以上が視聴したInstagramでのライブ配信は[14]、事態の初期段階の同時代性を色濃く反映するものだった。帝国劇場史上初の舞台の生配信であり、ジャニーズ事務所としても前代未聞の実践であった。

あれは全部、光一さんの企画です。帝国劇場での公演は三月末まで押さえていましたから、ご自身も無念の中断だった。そこで、光一さんが「配信したい」と。光一さんが自ら動かれて実現にこぎつけた。光一さんがスマートフォンを持って撮影した映像ですから、私も見たことのないものでしたね。それを通して、我々は俳優さんたちがコロナの中で考えているリアルな声を受けとめることができましたし、お客様もパフォーマンスを見ることができました。（池田篤郎「奇跡の一か月を創る」前出、五九頁）

配信中、堂本光一は、画面越しの観客（視聴者）に語りかける。

お客さんがいないってのは、ほんとうに寂しいですよ。やっぱりもちろん、いつもどおりやろうと思っていても、ちょっと本領発揮できない部分があるかなって気がしてますね。お客さんが入る、入らないで、音の聞こえ方っていうのも変わるんですよ。それで「ああ、お客さん入ってたらこういうふうな気持ちになってるだろうな」っていうのも、ちょっとありつつね。それ

に左右されないように稽古をしているんですけど、やっぱり、お客さんが入ってこそ舞台っていうものは完成するものだなというふうに、つくづく痛感しています。[15]

観客のいない客席。無観客での上演（収録）や配信を経験した舞台関係者は一様におなじ感覚をもっただろう。二〇二〇年三月二十二日という、外圧としてより積極的に無観客上演や収容人数制限が強いられていく少し前の時間に、堂本光一がみた光景とはいかなるものだったのか。

コロナ禍下における配信やオンライン上の表現（とその賛否）をめぐっては、演者と観者が時間と空間を共有することで成り立つ舞台芸術の本質にかかわる議論が活発化した。オンライン上でのコミュニケーションは、同期型の生配信であれば、空間の共有と双方向性は確保できずとも、時間の共有は可能になる。一方、非同期型のオンデマンド方式では実現できない。舞台芸術界は、徐々に同期型／非同期型それぞれのパフォーマンスを実験していくが、三月二十二日の時点で堂本光一が Instagram のライブ配信を試み、そのうえで演劇が対面によるライブに本質があると身をもって実感したことは、以降、堂本が対面での公演をいかに実現しうるかを模索する方向に接続されたにちがいない。

四　『Endless SHOCK-Eternal-』という変奏

すでに予定されていた、二〇二〇年秋の大阪公演（梅田芸術劇場メインホール、九月十五日～十月十二日）にあたって、まず堂本光一は、カンパニーの面々に公演実施の可否も含めて意見を仰いだという[16]。そこからうまれたのが、舞台上のソーシャルディスタンスを念頭において、感染症対策のガイドラインを厳守した、新たな構成・演出による『Endless SHOCK -Eternal-』（堂本光一作・構成・演出・主演）である。

本編から三年後の世界を描いたスピンオフ版。コウイチがいない世界で、のこされた人びとがコウイチとの思い出を回想する形式である。コウイチの不在という現実が、各登場人物の心情を本編以上に掘り下げる効果をうむ。三年前と劇の現在時間が交錯するなかで、存在しないコウイチが人びとの記憶に幻出されることで、観客の前にも彼が実体化する。コウイチの不在がむしろその存在を強調する趣向であった。

演出面では、感染リスク低減のため、客席上空を舞うフライングを無人の舞台上に空間を制限する形態に変えて多様なフライングを見せた。俳優の飛沫を考慮して映像を多

用し、モノローグの場面を増やした。演者が至近距離で激しく斬りあう殺陣はストップモーションや映像を使用することで処理した。「リアルな出来事ではなく誰かの記憶の中という表現なので、映像を使ってリスクを回避しました。ただ一対一での殺陣は、いつも通りのスピードで表現しています」（上野紀子「「3年後」から見えた世界」『AERA』二〇二〇年十月十二日）と、堂本はいう。また、オーケストラを舞台奥の段上へ移動し、舞台装置も簡略化。劇場ロビーの混雑緩和のために上演時間は休憩なしの二時間とするなど、種々の工夫が凝らされた。

堂本光一は『Endless SHOCK』のテーマである「Show must go on」について、ただ幕を開けつづけることが重要なのではない、とする。「今大事なのは、どんなに小さいことでも何かがあった場合には、すぐに幕を閉めること。そうしなければ、また幕を開けることが出来なくなってしまうと思う。そういう意味でのショー・マスト・ゴー・オンだと、僕は今、認識しています」（「「3年後」から見えた世界」前出）と新たな解釈を加えている。これは、前掲した井上芳雄の言葉とも符合するものだろう。コロナ禍下における堂本の現場でのリーダーシップには興行者側も瞠目している。

実に見事なまとめ方なんです。いろいろなことを開拓して、みんなの意見をちゃんと吸い上げながら、収斂させていく。『Endless SHOCK』のスピンオフ版である『Endless SHOCK -Eternal-』も、九月の大阪公演のために光一さんが短期間で創り上げました。本編はできないけれど、舞台上のディスタンスをとって、コロナ仕様の演出を創れないかと取り組んだものです。ジャニーさんがめざしたことの「先」が、こうやって見えていくのかなと思いました。（池田篤郎「奇跡の一か月を創る」前出、五九頁）

大阪公演は無事に乗り越えたものの、秋から冬にかけて感染者数は増加の一途をたどり、大晦日には東京都の新規感染者数が過去最多の千三百三十七人を数え、二〇二一年一月七日に二度目の緊急事態宣言が発出される（八日～二月七日）。一月十五日に投稿されたInstagramには、東宝と帝国劇場が連名で「上演に関するご案内」（十四日付）を載せている。

この度、1月7日に政府より発出された緊急事態宣言を受け、主催である私ども東宝株式会社では帝国劇場

「Endless SHOCK -Eternal-」を上演させていただくことと致しました。／発出日付で政府から各都道府県に通知された事務連絡では、「1月11日までに販売開始された催物のチケットについては開催制限を適用せず、そのチケットはキャンセル不要と扱う」とされており、すでにチケットを一部販売済みの本公演につきましても、この事務連絡に記載されている感染予防のための留意事項を遵守の上、上演させていただきます。

この時点で三月公演の詳細は未定。二月公演については新規のチケット販売をせず、予定していた一般前売は中止となった。くわえて、最前列と二列目をあける客席の調整や夜公演の開演時間を十八時から十七時半に三十分繰り上げるなど、東京都が定めた感染対策を徹底し、来るべき公演に備えている。

こうした事態の渦中に、堂本光一は、自ら監督を務めた映画版『Endless SHOCK』の編集作業をおこなっている[17]。二〇二〇年の帝国劇場公演中止後、無観客で撮影した本編の『Endless SHOCK』を映画館で上映する試みで、二月一日から二週間限定で全国ロードショーが決まっていた。十六台のムービーカメラとドローンを用いて客席や舞台上空から撮影した映像は、二〇二〇年二月二十六日をもって封じられてきた本編の精細な記録であり、無観客の客席だからこそ可能なアングルやシーンも多く、Instagram での配信と異なるかたちで、通常の舞台では目にすることのできない世界がスクリーンに投影されていた。また、本来の舞台であれば客席からの拍手などによる応答が間をつないだであろう無音の時間を無音のままのこしており、無観客というコロナ禍下の実態を直截につたえる編集になっていたことも忘れがたい。

この映画と同時期に『Endless SHOCK -Eternal-』（帝国劇場、二月四日～三月三十一日）が上演され、二つの『Endless SHOCK』を観ることができる趣向だった。

二月二日に発表された緊急事態宣言の期限延長（三月七日まで）を受けて、二月八日付の Instagram には、三月公演についても新たなチケット販売はおこなわず、一般前売の中止、客席の調整と夜公演の開演時間繰り上げといった措置が発表された。

そんな中、二月十三日の公演で、本来であれば前年に達成されているはずだった通算千八百回を迎える。三月二十八日には、十七時三十分開演の回の生配信をジャニーズネットオンラインで実施している（見逃し配信あり）。公演映像

の発信についても、堂本は非同期型と同期型の双方を状況に応じて使い分けているようにみえる。

緊急事態宣言の期間が長期化（三月八日、当時の菅義偉首相が、首都圏の一都三県において二週間の延長を発表。二十二日に解除）するなかで、『Endless SHOCK -Eternal-』は完走が叶った。しかし、その後、四月二十五日に三度目（六月二十一日に沖縄県を除いて解除）、七月十二日には四度目（沖縄県は期間延長。十月一日に全国で解除）の緊急事態宣言が発出され、期間延長がくり返されるたびに舞台芸術界は翻弄されつづけた。

そして、二〇二二年の『Endless SHOCK -Eternal-』公演――帝国劇場（四月十日～五月三十一日）と博多座（九月五日～十月二日）では、ライバル役が上田竜也から佐藤勝利（帝国劇場）と北山宏光（博多座）に、博多座公演のオーナー役が島田歌穂になる（帝国劇場では従来同様に前田美波里が出演）など、新キャストでの布陣が決まった。

二月十八日付で投稿されたInstagramによれば、堂本光一が『Endless SHOCK -Eternal-』の上演を決めたのは、製作発表会見（二月十八日）の二日前だったという。急遽プレスリリースに追記された文章を引いておく。

２０２２年、新型コロナの第六波が猛威をふるい、人々がコロナ以前の生活を取り戻せない状況が続いています。／そして、『Endless SHOCK』も、コロナ以前の完全な状態で、お客様の前で上演することは依然困難と言わざるをえません。／２０２０年以降、ニューノーマルを求められる時代に対応したエンタテイメントを発信し続けてきた、作・構成・演出・主演の堂本光一は、この会見の直前まで『Endless SHOCK』（本編）上演の可能性を模索してきましたが、お客様の『Endless SHOCK』への期待を少しでも損なうパフォーマンスは出来ないとの思いから、『Endless SHOCK』（本編）の２年ぶりの有観客上演は断念し、２０２２年のこの時代に、最大限可能なパフォーマンスと新たに盛り込んだ新演出『-Eternal-』の上演と、新キャストと共に無観客でパフォーマンスする『Endless SHOCK』（本編）の映像配信を決断しました

こうして、二〇二二年の『Endless SHOCK』は、本編の無観客収録による映像配信と、帝国劇場および博多座での『Endless SHOCK -Eternal-』公演という二本立てになった。本編映像と『Endless SHOCK -Eternal-』の組み合わせは二

〇二一年二月と同じだが、二〇二二年には、限られた時間のなかで本編の撮影と『Endless SHOCK -Eternal-』公演の稽古を同時並行して進めるという困難があった。ライバル役の佐藤勝利と北山宏光には新曲も用意されるなど、『Endless SHOCK -Eternal-』じたいが深化していく。

舞台の変化として、前年までの感染対策のガイドラインでは、舞台袖に「演者の人数分の着替え部屋を作らなければいけないという内容があ」ったために「袖が全部キャストの個室で埋まってしまい、全くセットが入れられ」なかった。したがって、舞台装置は簡略化せざるをえなかったが、二〇二二年に条件が緩和されたことで、舞台袖に装置を入れることが可能になり、映像で対応していた殺陣をじっさいにおこなうなど、ショウの部分は「ほぼ本編と同じ形」になった（堂本光一「今こそ、お客さまに楽しんでいただけることを」二〇二二年公演プログラム）。オーケストラも、舞台奥正面からオーケストラピットに移っている。

四月十日の帝国劇場初日に先駆けて、四月五日に帝国劇場で収録した『Endless SHOCK』本編映像を四月九日にジャニーズネットオンラインで配信（見逃し配信あり）。堂本光一は「本編の配信は、今回上演する『Endless SHOCK -Eternal-』の演出の一環という捉え方」（「今こそ、お客さまに楽しんでいただけることを」前出）と述べる。『Endless SHOCK -Eternal-』では、前年同様、映像が駆使されているが、配信用に新規収録された本編映像と実際の舞台を融合させることで、即時性に富んだ新たな表現世界を創出したといってよい。

この頃になると、明らかにコロナ禍による公演中止のフェーズが変化している。二〇二〇年の初期段階は、緊急事態宣言等の外圧による一斉中止であったが、同年秋頃から、公演関係者に陽性反応が確認され、一部日程を中止し、一定期間をおいて再開、という動きが増えはじめた。この場合、ただちに全公演中止となる場合は少ないが、断続的に中止の判断を迫られることになる。演者は抗原検査やＰＣＲ検査をくり返し受けながら舞台に立つわけで、前田美波里はそうした日々を「命懸け」（『Endless SHOCK -Eternal-』『act guide』二〇二二年四月）と表現する。

大過なく初日を開けた『Endless SHOCK -Eternal-』も、しかし「公演関係者の新型コロナウイルス感染症の陽性反応が確認された」（五月十八日付のInstagram）ため、五月十八日夜と十九日昼夜の三公演が中止となった。かように公演当日に判明し、急遽中止が決まる例が増えていく。さらに二十日の投稿では、新たに複数の関係者に陽性反応が

確認され、二十一日から二十三日までの公演中止を発表。二十五日以降の公演については二十三日十八時までに案内する旨が記されており、日々感染状況と対峙しながら、公演実施の可否と向き合わざるをえない現場の苦境が看取できる。二十三日には、その他の関係者について「健康状態の経過観察期間を経て、この度、医学専門家の監修のもと、公演再開が可能と判断」されたことで、二十五日以降の公演を予定どおり上演すると発表された。

そして五月三十一日昼の部、帝国劇場公演の最終日（夜の部をのこして）に、堂本光一は単独主演千九百回の節目を迎えた。本来であれば、二十三日昼の部であったが、計七公演の中止にともなってこの回での記録達成となった。森光子が一九二〇年から二〇一二年までに『放浪記』で達成した演劇における同一演目による単独主演記録二千十七回に迫った（堂本はミュージカルの記録を更新中）。森光子が九十二年かけて達成した記録であることを考えれば――むろん時代や諸条件の違いはあるにせよ――初演から二十数年で、遠からずそこに到達するこの公演は、コロナ禍を経てさらに進化を遂げたというべきだろう。

五　結びにかえて――二〇二二年と以降の時間

六月六日付のInstagramでは、まん延防止等重点措置解除から二か月以上が経過したことや、福岡県内の感染状況が落ち着いた状況に鑑み、博多座公演を『Endless SHOCK』本編の上演に変更することが発表された。

しかし、コロナ禍が舞台芸術界に与える影響はとどまることを知らない。

二〇二一年三月に帝国劇場で世界初演された『千と千尋の神隠し』（宮崎駿原作、ジョン・ケアード翻案・演出）の御園座公演（六月二十二日～七月四日）において、六月二十五日十二時の回が開場後に中止を発表という事態も起きた（結果的に千穐楽まで中止）。それまでにも開場間際に中止が決まるといった事態はあったが、観客が客席に座って開演を待つその最中に突如中止のアナウンスが流れたのは異例であった。公演の中止という出来事は、さまざまにフェーズを変えながら、興行を脅かしつづけている。

七月二十二日には、東京都の一日当たりの新規感染者数が三万四千九百九十五人、全国では十九万人をこえた。いずれも過去最多である。感染の「第七波」によって、全国の劇場で公演が中止され、舞台芸術の時間が失われていく。

徹底した感染対策をとりつづけてきた歌舞伎座も、七月十八日に第一部、十九日から二十二日まで三部制が全公演中止。二十二日には演者とスタッフ四十八人の陽性が確認され、松竹は翌日以降の全公演中止を発表した。二十六日には『ハリー・ポッターと呪いの子』（ＴＢＳ赤坂ＡＣＴシアター）の十二時十五分開演回が開場後に、宝塚歌劇団雪組公演『心中・恋の大和路』（シアター・ドラマシティ）も当日に中止を発表している。いずれも大劇場での公演（の一部）であり、中小規模の劇場が蒙る被害も甚大であり、調査と記録が必要であろう。

コロナ禍下の舞台芸術を最初期から支援しつづけている弁護士の福井健策は自身のTwitter（@fukuikensaku）で、緊急事態舞台芸術ネットワークが把握する範囲でも、七月に入って、ライブイベントの公演中止のペースが三・七倍に急増したと指摘[18]。そのうえで、政府が「現在の「無症状陽性者を見つけに行く」状況」から、二十二日付の事務連絡で「濃厚接触者の特定・行動制限はハイリスク施設に集中化することとし、同一世帯内以外の事業所等については、濃厚接触者の特定・行動制限は行う必要がない」[19]と一部方針を転換したことは、ライブイベント界にとって重要であると述べている[20]。

災厄は収束の気配をみせない。九月に予定されている『Endless SHOCK』博多座公演の上演形態について続報は出ていないが、これまでの経緯をふり返っても、直前まで検討が重ねられることは想像に難くない[21]。次々に襲いかかる現在進行形の危機に対して、堂本光一がいかなる決断を下し、道を切り拓くのか。先の見通せない世界で、堂本と『Endless SHOCK』の軌跡を、祈りとともに見守り、記憶し、記録を重ねていくほかない。

（二〇二二年七月二十七日脱稿）

【注】

1　厚生労働省のホームページに「イベントの開催に関する国民の皆様へのメッセージ　令和2年2月26日（安倍総理）」が発表された（https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/newpage_00002.html）。最終閲覧日二〇二二年七月十五日。

2　井上秀樹・藤谷浩二「消えかける、劇場の灯　再開発表↓一転中止も」『朝日新聞』二〇二〇年三月二十七日朝刊。

3　たとえば、当時松竹株式会社代表取締役副社長だった安孫子正は「二十六日の会見を受けて、各劇場が「三月は予定どおり初日を開けることできないな」と。でも当時は、一週間後とか十日後には開けられるんじゃないかと、みんなが思っていたんですね」（「歌舞伎は、不死鳥のように」、拙編『ロスト・イン・パンデミック――失

われた演劇と新たな表現の地平』春陽堂書店、二〇二一年、五二頁）と述べている。

4　https://corporate.pia.jp/news/detail_live_enta20210513.html（最終閲覧日二〇二二年七月十五日）。

5　https://corporate.pia.jp/news/detail_live_enta20220615.html（最終閲覧日二〇二二年七月十五日）。

6　拙編『ロスト・イン・パンデミック――失われた演劇と新たな表現の地平』（前掲注3）、拙稿「コロナ禍と演劇をめぐる思索――早稲田大学演劇博物館の取り組みを視座として」（『昭和文学研究』第八四集、二〇二二年三月）、藤谷桂子・拙編「新型コロナウイルスと演劇 年表抄――２０２１年６月～２０２２年１月」（『エンパクブック』第一一八号、二〇二二年三月）を参照されたい。

7　二〇一九年版では、オーケストラの編成を二十人に増員し、それまで舞台袖に置かれていたオーケストラを帝国劇場本来のオーケストラピットに配置するなど、種々の大きな改変が見られた。その変化については、萩尾瞳「引き締まり、洗練度増す『ＥｎｄｌｅｓｓＳＨＯＣＫ』」（『act guide』二〇一九年四月）を参照されたい。

8　たとえば『AERA』二〇二〇年二月十日号の「表紙の人」では、堂本光一の略年譜の二〇二〇年の項目として「3月30日夜、自らが持つミュージカル単独主演回数を更新する１８００回公演を達成する」と、その未来があたかも確定した現実のごとく明記されている。

9　本稿における『Endless SHOCK』の Instagram 公式アカウントの最終閲覧日は、脱稿時点ではすべて二〇二二年七月十五日。

10　なお、松竹は三月十八日に歌舞伎座、新橋演舞場、南座、大阪松竹座の三月公演中止を発表しており、中止／再開の判断が各社で分かれていく様子がうかがえる。

11　早稲田大学演劇博物館二〇二一年度春季企画展「Lost in Pandemic――失われた演劇と新たな表現の地平」の音声配信企画「コロナ禍と表現の現在地／可能性」のうち、「変わったこと、変わらないこと、劇場で生きること――井上芳雄さんに聞いた、コロナ禍と〝演劇〟の話」（二〇二一年七月五日収録。https://www.waseda.jp/enpaku/ex/14093/）。聞き手である稿者が音声配信から文字に起こし、冗語等を整理して成形した。

12　井上芳雄「ミュージカルのフロントランナーは〝ミュージカル愛〟ゆえに夜な夜な思考する」（平野祥恵＋長谷川あや編『WE MUST GO ON―２０２０年春、ミュージカル界のトップランナーが思うこと』WE MUST GO ON 出版プロジェクト、二〇二〇年）。

13　歌舞伎と配信の動向に関しては、高本教之「コロナ禍下の「新しい歌舞伎」を考える　オンライン配信「図夢歌舞伎『忠臣蔵』」と「須磨浦」」（『FORMES』第三号、東京都立大学大学院人文科学研究科表象文化論南大沢言語文化研究会、二〇二〇年十一月）に概要が整理されている。

14　無署名「堂本光一「ＳＨＯＣＫ」インスタライブに６万人！帝国劇場から初の舞台生配信」『サンスポ』二〇二〇年三月二十三日（https://www.sanspo.com/article/20200323-R6YYMSG2AJNITD2EBTYZDPSSQM/）最終閲覧日二〇二二年七月十五日。なお、配

信終了後、二十四時間はアーカイブ配信を視聴可能だった。

15 前掲「Lost in Pandemic――失われた演劇と新たな表現の地平」では、東宝とジャニーズ事務所の協力を得て『Endless SHOCK』インスタライブのダイジェスト版を展示会場で上映。その中で、堂本光一が画面に向かって語る言葉を稿者が文字に起こした。

16 池内亜紀「[ALL ABOUT] Endless SHOCK-Eternal-」『読売新聞』二〇二一年一月六日夕刊。

17 Instagram の公式アカウントに二〇二一年一月十六日付で投稿。

18 二〇二二年七月二十七日午前八時三十分。最終閲覧日二〇二二年七月二十七日。本稿脱稿後に発表された、増田愛子「舞台芸術「存亡の危機」 コロナ第7波、公演中止が急増」(『朝日新聞』二〇二二年八月十八日朝刊)も参照されたい。

19 https://www.mhlw.go.jp/content/000968058.pdf(最終閲覧日二〇二二年七月二十七日)。

20 二〇二二年七月二十七日午前八時四十分。最終閲覧日二〇二二年七月二十七日。

21 ジャニーズ事務所は、公式サイトで「タレント・社員全員で感染予防対策には努めているものの、本日までに30公演以上のコンサートを中止いたしました。現在、公演が中止になるたびに調整すべき対象公演が増加し、必然的に延期公演を行うための会場の確保が難しくなってまいりました。そのため、今後はグループ内に感染者が出ましても公演を実施する場合がございますので、何卒ご了承賜れますと幸甚に存じます」(二〇二二年七月二十九日付)と「ジャニーズグループ主催公演に関するお知らせ」を発表した(https://www.johnnys-net.jp/page?id=text&dataId=1951)。こうした方針が『Endless SHOCK』にいかなる影響を及ぼすかは本稿校正中の八月二十九日現在、詳らかではない。

[付記①] 引用文中、改行を／でしめした箇所があり、〔 〕内は引用者による注記である。本稿執筆にあたって、稿者は劇場版『Endless SHOCK』と『Endless SHOCK-Eternal-』(帝国劇場、二〇二二年五月二十六日夜の部)を実見し、DVD『Endless SHOCK』(Johnny's Entertainment、二〇二一年)を視聴して内容を確認した。なお、本稿脱稿後の公演中止等の情報については本稿で追いきれていないことをお断りしておく。

[付記②] 本稿校正中、博多座では『Endless SHOCK』本編が予定どおり、九月五日に初日を開けた。しかし、校了間際の九月九日付で Instagram の公式アカウントに「博多座公演一部中止のお知らせ」が投稿され、公演関係スタッフに新型コロナウイルス感染症の陽性反応が確認されたため、九月九日の十三時開演の部および十八時開演の部を急遽中止すると発表。十一日に同日以降の公演を予定通り上演と発表された。九月十三日現在、いまだ事態は予断を許さない状況である。

(立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター助教)